

## 陸機の詩語（三）

【キーワード】陸機・六朝・詩語・文選・陸雲

佐藤 利行

一  
六朝詩語の研究について、森野繁夫博士は次のように述べておられる<sup>①</sup>。

六朝期には、詩風の変遷や作詩の場の変化、それと思想の多様化にともない、新しい詩語が必要となった。具体的には山水自然の描写、人物や周囲の事物の描写、それに抽象的な心情表現など、従来の詩語では意味が十分には詠み込めないために、詩人達はそれぞれが新しい詩語を作って対応した。六朝に至るまでの詩語は、数もそれほど多くなく、一応は安定していて、それほど動きは無かったが、六朝になると以上述べたような理由で新しい詩語が求められるようになり、人々は競って新語の作成に励んだ。そうして其の成果は、それぞれの所属する文学集団の文会において発表され、評価を受けることになった。

このような状況にあつた六朝文学を正確に把握するためには、当時の詩が正しく読めなければならぬし、そのためには詩語の意味・用法がわからなければならぬ。六朝詩語の収集と整理はそのために先ずしなければならぬ作業である。そのうえで始めて詩語を正確に解釈することができ、個々の詩人の詩語作成の工夫、更には詩語を通して各詩人の個性を読みとることができる。また六朝期の詩語が、後の時代の詩人達に何如に継承されていたかということもわかってくる。

方法としては先ず『文選』所収の六朝詩から六朝の詩語を集めることから始める。なぜ『文選』から始めるかというと、その李善注を利用するためである。李善注は、詩文に使われている語彙の用例を前代の作品に求め、その用例を踏まえて詩文の解釈をするように作られている。従って前代に用例のある語を李善は引証として挙げているが、用例の無い詩語、すなわち新しく作られた詩語の場合は李善は引証を行なうことができない。従

つて引証の無い語の場合は、六朝期の新しい詩語である可能性が大きい。なお、『文選』は胡刻本を使用するが、その李善注は完全なものではなく逸脱した箇所もあるようなので、李善の引証が無い場合でもそれが李善の判断だとは簡単には決められない。従ってその点には注意して対処したい。李善の施注方法については斯波六郎博士の「李善文選注引文義例考」(『日本中国学会報』第二集)に詳しく述べられている。

以上のような目的・方法によって六朝詩語の収集と整理を行ない、六朝の詩人達の造語法、造句法などをまとめることにするが、ここでは西晋の陸機の詩を扱う。陸機の詩のうち、「贈尚書郎顧彦先」二首、「贈顧交趾公真」「贈從兄車騎」「答張士然」「贈馮文熊」の六首については、すでに検討を終えた<sup>②</sup>。この度は「為顧彦先贈婦」二首および「贈弟士龍」の合わせて三首の詩を取り上げる。

### 七 為顧彦先贈婦(顧彦先の為に婦に贈る)其一

この詩は、陸機が同郷の顧榮(字は彦先)に代わって、その妻に贈ったもの。ただし、『文選』所収の題下の李善注には、「集云、為全彦先作。今云顧彦先、誤也」(集に云ふ、全彦先の為に作ると。今、顧彦先と云ふは、誤りなり)とあり、そうであれば顧彦先とは別の人となる。

なお、陸機の姉が顧榮に嫁いだという資料もある<sup>③</sup>。(『文選』卷二四)

1	辞家遠行游	家を辞して	遠く行游し
2	悠悠三千里	悠悠たり	三千里
3	京洛多風塵	京洛	風塵多く
4	素衣化為縑	素衣も化して縑と為る	
5	脩身悼憂苦	身を脩むるも	憂苦を悼み
6	感念同懷子	同懷の子を感念す	
7	隆思乱心曲	隆思は心曲を乱し	
8	沈歛滯不起	沈歛	滯りて起らず
9	歛沈難克興	歛び沈みては	克く興し難く
10	心乱誰為理	心乱れては	誰か為に理めん
11	願假歸鴻翼	願はくは歸鴻の翼を假り	
12	翻飛游江汜	翻飛して江の汜りに游ばん	

家に別れを告げて遠く旅に出て、はるばると三千里の道のりをやつて来た。ここ晋の都(洛陽)では風に飛び散る塵が多く、白い衣服も黒ずんでしまった。行ないを脩めても憂い苦しむばかり、懐いを同じくするそなたのことが思われてならない。高まる思いに心の奥は乱れるも、沈んでしまった歛びは滞ったまま起らない。歛びは(ひとたび)沈んでしまえばわき起こすこと

は難しく、心が乱れては誰がそれをおさえることができよう。願わくは帰りゆく大鳥の翼を借りて、翔り飛んで(そなたのいる)江のほとりに遊びたいもの。

【李善の引証】(字句の解釈や地名の説明は省く)

1 辞家遠行游 2 悠悠三千里

「鸚鵡賦」曰、女辞家而適人。蔡琰詩曰、悠悠三千里、何時復來會。

3 京洛多風塵 4 素衣化為縑 5 脩身悼憂苦 6 感念同懷子

「孟子」曰、古之人、不得志、脩身見於世。「列子」曰、卑辱則憂苦。

7 隆思乱心曲 8 沈歛滯不起

薛君「韓詩章句」曰、時風又且暴、使己思益隆。「毛詩」曰、乱我心曲。

9 歛沈難克興 10 心乱誰為理 11 願假歸鴻翼 12 翻飛游江汜

魏文帝「喜霽賦」曰、思寄身於鴻鸞、拳六翻而輕飛。「毛詩」曰、江有汜。

以下、李善の引証を主として踏まえ、陸機が此の詩に使用している詩語について検討を加える。

1 辞家遠行游 2 悠悠三千里

「辞家」について李善は櫛衡「鸚鵡賦」の「女辞家而適人、臣出身

而事主」(女は家を辞して人に適<sup>ち</sup>ぎ、臣は身を出だして主に事<sup>つか</sup>ふ)を引く。古くからある語。

「行游」について李善は引証しないが、この語は「史記」刺客列伝(聶政)に「臣有仇、而行游諸侯衆矣」(臣は仇有り、而して諸侯を行游すること衆し)と見える。詩の用例としては、魏の文帝「芙蓉池作」に「乘輦夜行游、逍遙步西園」(輦に乗りて夜に行游し、逍遙として西園を歩く)というのがある。これも古くからのもの。

「悠悠三千里」ここでは呉と洛陽との距離をいう。「悠悠」は遙かに遠いさま。「三千里」は遠い距離。李善は蔡琰の「悲憤詩」に「悠悠三千里、何時復來會」(悠悠たり三千里、何れの時か復<sup>ま</sup>た來たり會せん)とあるのを引く。

3 京洛多風塵 4 素衣化為縑

「風塵」ここでは、風に飛び散る塵のことをいう。この意味での用例としては、「漢書」食貨志上に「春不得避風塵」(春は風塵を避くるを得ず)というのがある。李善は引証しない。

「素衣」は白い衣服。李善は引証しないが、「毛詩」唐風・揚之水に「素衣朱襮、從子于沃」(素衣朱襮、子に沃に従はん)とあるように、古くからのもの。

5 脩身悼憂苦 6 感念同懷子

「脩身」について李善は「孟子」尽心章句上の「古之人、得志、澤加於民、不得志、脩身見於世」(古への人は、志を得れば、澤民

に加はり、志を得ざれば、身を脩めて世に見はる(を引く。古くからあるもの)。

「憂苦」については、李善は『列子』楊朱篇の「卑辱則憂苦」(卑辱なれば則ち憂苦す)を引く。これも古くからのもの。

「感念」について李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。陸機の例としては他に次のものがある。

・指景玩日慮安危、感念平生淚交揮

景を指し日を玩んでは安危を慮ふ、平生を感念しては

涙交も揮ふ

(「百年歌」)

また陸雲にも次のような例がある。

○西晋・陸雲「答張士然」…感念桑梓域、彷彿眼中人(桑梓の域に感念し、眼中の人を彷彿す)

「同懷子」此の句について李善は引証しない。ただ、此の句は

『文選』卷二一・謝靈運「登石門最高頂」詩の「惜無同懷客、共登

青雲梯」(惜しむらくは懷ひを同じくする客の、共に青雲の梯に

登る無きを)の李善注に、「陸機詩曰」として引かれている。陸

機以前の用例は未見。ただ、陸雲には次のような例がある。

○西晋・陸雲「為顧彦先贈婦往返四首」其一…彼美同懷子、非爾

誰為心(彼の美なる同懷の子、爾に非ずんば誰か心を為

めん)

7 隆思乱心曲 8 沈歎滯不起

「隆思」は、盛んなる思い。ここでは妻への思いをいう。此の語について李善は薛君「韓詩章句」の「時風又且暴、使已思益隆」(時に風は又た且く暴れ、己が思ひをして益ます隆んならしむ)を引くが、これは「隆思」そのものの用例ではない。陸機以前の用例は未見。同時代のものとしては、次のような例が見られる。

○西晋・張華「答何劭」…悟物增隆思、結恋慕同儕(物を悟りて

隆思を増し、恋を結びて同儕を慕ふ)

「乱心曲」について李善は『毛詩』秦風・小戎の「在其板屋、乱我心曲」(其の板屋に在りて、我が心曲を乱る)を引く。

「沈歎」は、沈んでしまった歎び。李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。

9 歎沈難克興 10 心乱誰為理

「心乱」について李善は引証しないが、この語は後漢の蔡邕「隸勢」に「近而察之、心乱目眩」(近くして之を察れば、心乱れて目眩む)と見えるように、古くからのもの。

11 願假歸鴻翼 12 翻飛游江汜

二句について李善は魏の文帝「喜霽賦」に「思寄身於鴻鸞、拳六翮而輕飛」(身を鴻鸞に寄せ、六翮を挙げて輕飛せんことを思

ふ)を引く。

「翻飛」について李善は引証しないが、曹植の「朔風」詩に「願隨越鳥、翻飛南翔」(願はくは越鳥に随ひ、翻飛して南に翔け

ん)と見えるように、古くからのもの。此の語は陸機の他の詩で

も、次のように使われている。

・拊翼同枝條、翻飛各異尋

翼を拊ちて枝條を同じくし、翻飛しては各おの尋たかさを異にす

・有命集止、翻飛自南

命有りて集れば、翻飛して南よ自りす

(「贈馮文罷」)

(「贈馮文罷遷斥丘令」其三)

「游江汜」について李善は『毛詩』召南・江有汜の「江有汜、之子とち歸」(江に汜有り、之の子 歸とちぐ)を引く。此れに基づく句造り。

此の詩に使われている詩語・詩句を整理すると、次のようになる。

①前代の作品にある語をそのまま使ったもの。

「辞家」「行游」「悠悠三千里」「風塵」「素衣」「脩身」「憂苦」「心乱」「翻飛」

②前代の作品に使われている語句に手を加えて使ったもの。

「乱心曲」(『毛詩』秦風・小戎の「在其板屋、乱我心曲」に拠ったもの。)

「游江汜」(『毛詩』召南・江有汜の「江有汜、之子歸」に拠ったもの。)

③陸機の造語。

「感念」「同懷子」「隆思」「沈歎」

八 為顧彦先贈婦(顧彦先の為に婦つまに贈る) 其二

- |    |       |   |
|----|-------|---|
| 1  | 東南有思婦 | 東南に思婦有り   |
| 2  | 長歎充幽闈 | 長歎 幽闈 <small>いづな</small> に充 <small>み</small> つ                          |
| 3  | 借問歎何為 | 借問 <small>しよもん</small> す 歎ずるは何の為ぞ                                       |
| 4  | 佳人眇天末 | 佳人 天末 <small>はる</small> に眇 <small>はる</small> かなり                        |
| 5  | 游宦久不歸 | 游宦して久しく歸らず  |
| 6  | 山川脩且闊 | 山川 脩 <small>ひさ</small> く且 <small>かつ</small> つ闊 <small>はる</small> かなり    |
| 7  | 形影參商乖 | 形影は參商 <small>しんしやう</small> のごとく乖 <small>あひま</small> き                   |
| 8  | 音息曠不達 | 音息も曠 <small>ひき</small> しく達せず  |
| 9  | 離合非有常 | 離合は常 <small>つね</small> 有るに非ず  |
| 10 | 譬彼弦與箏 | 譬 <small>たと</small> ふれば彼の弦 <small>つる</small> と箏 <small>やはず</small> のごとし |
| 11 | 願保金石軀 | 願 <small>ねが</small> はくは 金石の軀 <small>み</small> を保ち                       |
| 12 | 慰妾長飢渴 | 妾 <small>わが</small> が長き飢渴を慰めんことを  |

東南の(呉の)地に思い慕う婦がいて、その長き嘆きは奥まった部屋に充ちている。どうしてそのように嘆くのかと問ねてみると、わが夫は天のはて(のように遠い都)の地にいるのだという。(夫は)仕官して久しく帰ることもなく、(二人を隔てる)山川は長く続きその上はるばると広い。形にそう影のような夫婦であるのに參しんと商しやうのごとく乖あひまき、便りも久しく途絶えている。

人の世の離合はまことに定めのないもの、たとえばあの弦と矢筈とのように。どうか金石のごとき身体を保って、わたしの長らくの飢渴を慰めてくださるよう。

【李善の引証】(字句の解釈や地名の説明は省く)

1 東南有思婦 2 長歎充幽闈

曹子建「七哀詩」曰、上有愁思婦、悲歎有餘哀。「西京賦」曰、重閨幽闈。

3 借問歎何為 4 佳人眇天末

「西京賦」曰、眇天末以遠期。

5 游宦久不歸 6 山川脩且闊

『漢書』薄昭與淮南王書曰、游宦事人。

7 形影參商乖 8 音息曠不達

『左氏伝』子産曰、昔高辛氏有二子。伯曰閼伯、季曰實沈。居曠林、不相能。日尋干戈、以相征討。后帝不臧、遷閼伯于商丘、主辰。商人是因、故辰為商星。遷實沈于大夏、主參。唐人是因、以服事夏商。其季世曰唐叔虞。故參為晋星。

9 離合非有常 10 譬彼弦與箏

『呂氏春秋』曰、夫萬物成則毀、合則離。離則復合、合則復離。

11 願保金石軀 12 慰妾長飢渴

古詩曰、人生非金石、豈能長壽考。李陵「贈蘇武詩」曰、思得瓊樹枝、以解長飢渴。

以下、李善の引証を主として踏まえ、陸機が此の詩に使用している詩語について検討を加える。

1 東南有思婦 2 長歎充幽闈

「思婦」について李善は曹植「七哀詩」の「上有愁思婦、悲歎有餘哀」(上に愁思の婦有り、悲歎して餘哀有り)を引く。古くからある語。

「幽闈」について李善は張衡「西京賦」の「重閨幽闈、軫相踰延」(重閨幽闈、軫た相ひ踰延す)を引く。奥深い部屋をいう語で、古くからのもの。

3 借問歎何為 4 佳人眇天末

「借問」この語について李善は引証しない。西晋以前の用例は未見。陸機の他の用例としては、次のようなものがある。

・借問邦族間、惻愴論存亡

邦族の間を借問するに、惻愴として存亡を論ず

(「門有車馬客行」)

・借問子何之、世網嬰我身

借問す 子 何くにか之くと、世網我が身に嬰る

(「赴洛道中作」其二)

また同時代の用例としては以下のようなものが見られる。

○西晋・張載「登成都白菟樓」…借問楊子宅、想見長卿廬(借問す楊子の宅、想見す 長卿の廬)

○西晋・張載「七哀詩」…借問誰家墳、皆云漢世主(借問す誰が家の墳ぞと、皆な云ふ漢の世主と)

○西晋・張協「雜詩十首」其八…借問此何時、胡蝶飛南園(借問す此れ何の時ぞと、胡蝶南園に飛ばん)

「佳人」この言葉自体は『楚辞』九歌・湘夫人に「聞佳人兮召余、將騰駕兮偕逝」(佳人の余を召すと聞き、將に騰駕して偕に逝かんとす)と見えるように、古くからあるもの。そこでは臣下が主君を指す語として用いられている。ただ、陸機は此の語を夫を指すものとして使っている。

「天末」について李善は張衡「東京賦」(李善は「西京賦」というが、恐らく誤り)の「眇天末以遠期」(天末を眇かにして以て遠く期す)を引く。古くからある語。陸機の他の用例としては、次のようなものがある。

・遊子眇天末、還期不可尋

遊子 天末に眇かなれば、還期は尋ぬ可からず

(「擬行行重行行」)

・引領望天末、譬彼向陽翹

領を引して天末を望む、譬ふれば彼の陽に向かふの翹のごとし

(「擬蘭若生朝陽」)

5 游宦久不歸 6 山川脩且闊

「游宦」(他郷にあって仕官すること)について、李善は『漢書』

卷四四・淮南王伝に「亡之諸侯、游宦事人」(亡げて諸侯に之き、游宦して人に事ふ)を引いており、これは古くからある語。「游宦」二字、『文選』は「遊官」に作るが、今は本集に拠る。「游宦」の語を陸機はよく使っており、以下のようなものがある。

・游宦会無成、離思難常守

游宦 成ること無かる会し、離れの思ひは常には守り難し

(「擬明月何皎皎」)

・羈旅遠游宦、託身承華側

羈旅にして遠く游宦し、身を承華の側に託す

(「赴洛」其二)

・翩翩游宦子、辛苦誰為心

翩翩たる游宦の子、辛苦して誰か心を為めん

(「贈從兄車騎」)

・如何耽時寵、游宦忘歸寧

如何ぞ 時寵に耽り、游宦して歸寧を忘るを

(「為陸思遠婦作」)

7 形影參商乖 8 音息曠不達

「形影」について李善は引証しないが、この語は『韓非子』功名篇に「名実相持而成、形影相応而立」(名実 相ひ持して成り、形影 相ひ応じて立つ)とあるように、古くからのもの。

「參商」は、參星と商星。參星は西の空に、商星は東の空に在っ

て、その出没の時も異なり、二星は相い見ることがない。ここから親しくすべき者が、互いに離れていることに譬える。李善は『左氏伝』昭公元年の記事を引き、その昔、高辛氏の二子、閼伯と実沈とは仲が悪かったので、そこで后帝(堯帝)は、閼伯を商丘に遷して商星をつかさどらしめ、実沈を大夏に遷して参星をつかさどらしめた、という故事を紹介する。「参商」という語については、魏の曹植「與吳季重書」に「面有逸景之速、別有参商之闊」(面しては逸景の速有り、別れては参商の闊有り)と見えるように、古くからのもの。陸雲の詩に次のような例が見られる。

○西晋・陸雲「答兄機」…神往同逝感、形留悲参商(神往けば逝くもの感に同じきも、形留まれば参と商とを悲しむ)

「音息」について李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。

#### 9 離合非有常 10 譬彼弦與筈

「離合」について李善は『呂氏春秋』に「夫萬物成則毀、合則離。離則復合、合則復離」(夫れ萬物は成れば則ち毀れ、合へば則ち離る。離るれば則ち復た合ひ、合へば則ち復た離る)とあるのを引く。「離合」の語は、『楚辞』離騷に「紛總總其離合兮、斑陸離其上下」(紛總總として其れ離合し、斑陸離として其れ上下す)とあるように古くからのもの。

#### 11 願保金石軀 12 慰妾長飢渴

「金石」について李善は「古詩十九首」其十一の「人生非金石、豈

能長寿考」(人の生まるるや金石に非ず、豈に能く長く寿考ならんや)を引く。古くからあるもの。

「慰妾長飢渴」此の句は李善が引くように、李陵の「別詩」の「思得瓊樹枝、以解長飢渴」(思ひて瓊樹の枝を得て、以て長き飢渴を解かん)とあるのに拠った表現。

此の詩に使われている詩語・詩句を整理すると、次のようになる。

①前代の作品にある語をそのまま使ったもの。

「思婦」「幽蘭」「佳人」「天末」「游宦」「形影」「参商」「離合」「金石」

②前代の作品に使われている語句に手を加えて使ったもの。

「慰妾長飢渴」(李陵「別詩」の「思得瓊樹枝、以解長飢渴」に拠って、陸機は此の句を作った。)

③陸機の造語。

「借問」「音息」

#### 九 贈弟士龍(弟の士龍に贈る)

陸機が弟の陸雲に贈った詩。呉から洛陽に赴く際のものと思われる。この詩は『陸士龍文集』卷四にも収められており、そこでは詩題が「答兄平原」となっている。『芸文類聚』卷一九も「贈兄詩」と題して陸雲の作とする。(『文選』卷二四)



- |    |       |   |
|----|-------|---|
| 1  | 行矣怨路長 | 行かんとすれば 路の長きを怨み   |
| 2  | 怒焉傷別促 | 怒焉 <small>てきえん</small> として 別れの促 <small>すみや</small> かなるを傷む               |
| 3  | 指途悲有餘 | 途を指しては 悲しみは餘 <small>あま</small> り有り                                      |
| 4  | 臨觴歎不足 | 觴 <small>さかづき</small> に臨みて 歎 <small>なげ</small> びは足らず                    |
| 5  | 我若西流水 | 我は西に流るる水の若 <small>ごと</small> く  |
| 6  | 子為東峙岳 | 子は東に峙 <small>とどま</small> る岳 <small>やまた</small> 為り                       |
| 7  | 慷慨逝言感 | 慷慨して 逝 <small>ゆ</small> くものの言 <small>ことば</small> は感あり                   |
| 8  | 徘徊居情育 | 徘徊して 居るものの情 <small>こころ</small> は育 <small>うま</small> る                   |
| 9  | 安得携手俱 | 安 <small>いづく</small> んぞ手を携へて俱 <small>とも</small> にするを得ん                  |
| 10 | 契闊成駢服 | 契闊 <small>けいくわつ</small> にも駢服 <small>ひひく</small> を成 <small>な</small> さんに |

旅立とうとすれば路の長さが怨まれ、憂わしくも別れの迫ってくるのが傷まれる。前途を指さし見れば悲しみはあふれ、盃を前にして歎びの心はわいてこない。わたしは西に流れゆく水のごとく、あなたは東にとどまっている岳やまたのよう。慷慨のあまり行く者の言葉は感情にあふれ、徘徊しているうちにとどまる者も悲しくなってしまう。手を取り合っあって一緒におることがどうしてできよう、どんなに苦しくとも服馬と副え馬うまとのように離れずにいたいものを。

【李善の引証】（字句の解釈や地名の説明は省く）

1 行矣怨路長 2 怒焉傷別促

『論語』曰、君命召、不俟駕行矣。曹子建「贈白馬王」曰、怨彼東路長。『詩』曰、我心憂傷、怒焉如擣。曹子建「送庾氏詩」曰、別促会日長。

3 指途悲有餘 4 臨觴歎不足 5 我若西流水 6 子為東峙岳  
7 慷慨逝言感 8 徘徊居情育 9 安得携手俱 10 契闊成駢服  
『毛詩』曰、死生契闊、與子成說。『毛詩』曰、携手同行。

以下、李善の引証を主として踏まえ、陸機が此の詩に使用している詩語について検討を加える。

1 行矣怨路長 2 怒焉傷別促

「行矣」について李善は『論語』郷党篇の「君命召、不俟駕行矣」（君命じて召せば、駕を俟たずして行く）を引く。古くからのもの。「怨路長」については、李善は曹植の「贈白馬王彪」詩に「汎舟越洪濤、怨彼東路長」（舟を汎うかべて洪濤を越え、彼の東路の長さを怨む）を引く。陸機の句は、これに拠ったもの。

「怒焉」は、憂うるさま。李善は『毛詩』小雅・小弁の「我心憂傷、怒焉如擣」（我が心は憂傷し、怒焉てきえんとして擣うつが如し）を引く。これも古くからあるもの。

「別促」について李善は曹植の「送庾氏」詩の「山川阻且遠、別促会日長」（山川は阻はしく且つ遠く、別れは促すみやかにして会ふ日は長し）を引く。

## 3 指途悲有餘 4 臨觴歎不足

「指途」は、前途を指さして見ること。李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。

「臨觴」について李善は引証しない。陸機以前の用例は未見。陸機には此の詩の他に、次のような例がある。

・置酒高堂、悲歌臨觴

高堂に置酒し、悲歌して觴に臨む

(「短歌行」)

・対食不能殮、臨觴不能飲

食に対ふも殮ふ能はず、觴に臨むも飲む能はず

(「為周夫人贈車騎」)

また同時代の例としては、

○西晋・陸雲「答兄機」…銜思恋行邁、興言在臨觴(思ひを銜みて行邁を恋ひ、興ちて言に觴に臨むに在り)がある。

## 5 我若西流水 6 子為東峙岳

「西流水」「東峙岳」洛陽に去りゆく陸機みずからを西の方角に流れてゆく水と、また呉にとどまる陸雲のことを東に止まる丘と表現した。二句について李善は引証しない。

## 7 慷慨逝言感 8 徘徊居情育

「慷慨」は、曹植の「箜篌引」に「秦箏何慷慨、齊瑟和且柔」(秦箏は何ぞ慷慨たる、齊瑟は和にして且つ柔なり)とあるように、

古くからのもの。

「逝言」は、行く者の言葉。李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。

「徘徊」について李善は引証しないが、此の語は宋玉の「風賦」に「徘徊於桂椒之間、翱翔於激水之上」(桂椒の間に徘徊し、激水の上に翱翔す)と見えるように、古くからのもの。

「居情」とは、留まり居る者の心情。李善は引証しない。陸機以前の用例も未見。後の時代の例としては、次のものがある。

○唐・歐陽詹「初發太原途中寄太原所思」…去意自未甘、居情諒猶辛(去意自ら未だ甘からず、居情諒に猶は辛し)

## 9 安得携手俱 10 契闊成駢服

「携手」について李善は「毛詩」邶風・北風の「惠而好我、携手同行」(恵して我を好せば、手を携へて同行かん)を引く。

「契闊」について李善は、同じく「毛詩」邶風・擊鼓の「死生契闊、與子成説」(死生契闊、子と説ひを成す)を引く。「携手」とともに古くからあるもの。

「駢服」四頭だての馬車で、中の二馬が服馬、服馬の副え馬が駢馬。李善は引証しないが、魏の文帝「出婦賦」に「撫駢服而展節、即臨沂之旧城」(駢服を撫して節を展べ、臨沂の旧城に即く)と見え、古くからのもの。

此の詩に使われている詩語・詩句を整理すると、次のように

なる。

①前代の作品にある語をそのまま使ったもの。

「行矣」「怒焉」「別促」「慷慨」「徘徊」「携手」「契闊」「駢服」

②前代の作品に使われている語句に手を加えて使ったもの。

「怨路長」(曹植「贈白馬王彪」詩の「汎舟越洪濤、怨彼東路長」に拠って、陸機は此の句を作った。)

③陸機の造語。

「指途」「臨觴」「西流水」「東峙岳」「逝言」「居情」

以上、今回は陸機の「為顧彦先贈婦」二首および「贈弟士龍」の三首の詩を取り上げて、陸機の詩語について見ていった。ただ検討した対象が少ないけれども、今の段階で気づいた点をまとめてみたい。

先ず、陸機は気に入った詩語を多用するということがある。これは何も陸機だけに限ったことではないであろうが、陸機にはそういう傾向が見られる。例えば「為顧彦先贈婦」其二に、「游宦久不帰、山川脩且闊」という句があるが、ここの「游宦」の語は、陸機の「擬明月何皎皎」「赴洛」其二「為陸思遠婦作」「贈從兄車騎」の四首の詩に用いられている。

また、「為顧彦先贈婦」其一の「願假帰鴻翼、翻飛游江汜」句に見える「翻飛」の語は、「贈馮文龍」「贈馮文龍遷斥丘令」其三でも使われている。

次に、陸機が造ったと思われる詩語のうち、弟の陸雲と共通の詩語が目につくという点である。例えば、「為顧彦先贈婦」其一の「脩身悼憂苦、感念同懷子」句に使われている「感念」の語は、陸機の「百年歌」でも用いられているが、陸雲の「答張士然」でも、「感念桑梓域、彷彿眼中人」と使われている。また、「贈弟士龍」の「指途悲有餘、臨觴歎不足」句に用いられている「臨觴」は、陸機の「短歌行」「為周夫人贈車騎」にも使われているが、陸雲の「答兄機」でも、「銜思恋行邁、興言在臨觴」と使われている。こうした例は、今回取り上げた詩以外にも多く見られることである。

このように、陸機・陸雲の間に共通する語彙が多いということの理由として、二陸が普段から詩文を制作する際に、互いの作品を添削し合っていたということが考えられる。そのことを示す資料として、陸雲が兄の陸機に宛てた書簡「與兄平原書」其二五を挙げてみよう。

雲再拜。一日会公大欽。欣命坐者皆賦諸詩。了不作備。此日又病極。得思惟立草、復不為。乃倉卒退還。猶復多少有所定、猶不副意。與頌雖同體、然佳不如頌。不解此意。可  
以王弘遠去當祖道、似當復作詩。構作此一篇、至積思、復欲不如前倉卒時。不知為可存録不。諸詩未出、別写送。弘遠詩極佳。中靜作亦佳。張魏郡作急就詩、公甚笑燕。王亦

似不復祖道弘遠。已作為存耳。兄園葵詩清工。然猶復非兄詩妙者。雲詩亦唯為彼一語如佳。先已先得、便自委頓。欲更作之、昔如已身先此篇詩、了不復彷彿識有此語。此語於常言為佳。謹啓。

雲再拜。一日、公に会して大いに欽む。欣びて坐する者に命じて皆な諸を詩に賦せしむ。了く備へを作さず。此の日は又た病極まる。思惟して草を立つるを得たるも、復た為さず。乃ち倉卒として退還す。猶ほ復た多少定する所有るも、猶ほ意に副はず。頌と體を同じくすと雖も、然れども佳は頌に如かず。此の意を解せず。王弘遠の去るを以て祖道に當たる可く、當に復た詩を作るべきに似たり。此の一篇を構作して、思ひを積むに至るも、復た前の倉卒たりし時に如かざらんと欲。為に存録す可きや不やを知らず。諸詩は未だ出ださざれば、別に写して送る。弘遠の詩は極めて佳なり。中靜の作も亦た佳なり。張魏郡は急就の詩を作り、公は甚だ笑ひ燕ぶ。王も亦た復た弘遠を祖道せざるに似たり。已に作れば為に存する耳。兄の「園葵の詩」は清工なり。然れども猶ほ復た兄の詩の妙なる者に非ざるがごとし。雲の作は亦た唯だ彼の一語の為に佳なるが如し。先に已に先づ得たれば、便自委頓す。更めて之を作らんと欲するも、昔已に身ら此の篇の詩を先にするが如きは、了く復た彷彿として此の語有るを識らず。此の語は常言に於いて佳為り。謹啓。

「雲再拜。先日、公のもとに会合し、大いに恐縮いたしました。(公は)喜ばれ一坐の者に命じて詩をお作らせになりました。(私は)まったく準備もしておらず、またこの日は病気が悪く、なんとか考えをめぐらせて案は立てましたが、作ることができませんでした。そこであたふたと席を下りました。後でいくらか手を加えたのですが、やはり気に入りません。頌と同じように作ればいいのですが、頌のようにはうまくいきません。なぜだか分かりません。王弘遠が出発するに当たり、祖道のための詩を作らねばならないようなので、この一篇の構想を立てて、思いをめぐらせましたが、以前に(公の所で)あわてた時のものにも及ばないようです。さて、書きとどめておいてもよいものかどうか。諸々の詩はまだ世に出しておりませんので、別に書き写してお送りします。弘遠の詩はとてすばらしく、中靜の詩も立派です。張魏郡は即興の詩を作り、公はひどくお笑ひになり喜ばれました。王もまた弘遠を祖道していないような詩を作りました。もう出来上がっているので、留めてあります。兄上の「園葵の詩」は、清工なものではありますが、兄上の詩の妙なるものではないようです。私の詩も、ただあの一語のためにすばらしく思われるだけです。先日、すでにあの語ができたので、そのまま作らずに放っておきました。改めて作ろうと思いましたが、以前、自分がこの詩を作った時のことは、全くほん

やりとして、(その時に作っておいた)この語があるのを忘れてしまっていました。ただこの語は、その中のありふれた語の中にあつて、良いというだけのことです。謹啓。」

このように、陸機陸雲兄弟は、詩文を作ってはそれを互いに添削するというを行なっていたようで、ここに挙げた書簡以外にも、そのことを示すものが多く見られる。<sup>④</sup>恐らく「陸は、こうした添削の過程において、これはと思った詩語、気に入った詩語が有れば、それを自分の作品のなかに取り込んでいったものと思われる。

以上、この度は『文選』に収める「為顧彦先贈婦」二首および「贈弟士龍」の三首の詩を取り上げて、陸機の詩語について検討を加えたが、引き続き同様に『文選』所収の詩について調査を進めてゆきたい。

(注)

- ① 「六朝の詩語―謝朓『宣城郡出新林浦向版橋』詩について―」(『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』白帝社)に拠る。
- ② 拙論「陸機の詩語(一)」(『中国中世文学研究 四十周年記念論文集』白帝社)および「陸機の詩語(二)」(『安田女子大学大学院開設十周年記念論文集』)を参照。
- ③ 拙論「陸機の兄弟について」(『中国中世文学研究』第四十号)

を参照。

④ 拙著『陸雲研究』(白帝社)を参照。

## 陸機の詩語（3）

Toshiyuki SATO

在《詩品》中、鍾嶸視陸機為上品、併對其詩做了如下評述：

其源出於陳思。才高辭贍、舉體華美、氣少於公幹、文劣於仲宣。尚規矩、不貴綺錯、有傷直致之奇。然其咀嚼英華、厭飫膏澤、文章之淵泉也。張公歎其大才、信矣。

鍾嶸指出了陸機詩的許多特點。本文為進一步探討陸機詩的本質、從收於《文選》的陸機詩中選出《為顧彥先贈婦》二首和《贈弟士龍》這三首詩、對其進行了深入而具體的考察。